●肥後国分寺の再検討１

肥後国分寺跡は、熊本県熊本市中央区出水１丁目１－５６にある国分寺付近だと考えられている。

しかし従来考古学的発掘は、昭和 45 年 46 年に松本雅明氏らによって行われたものが唯一であった。

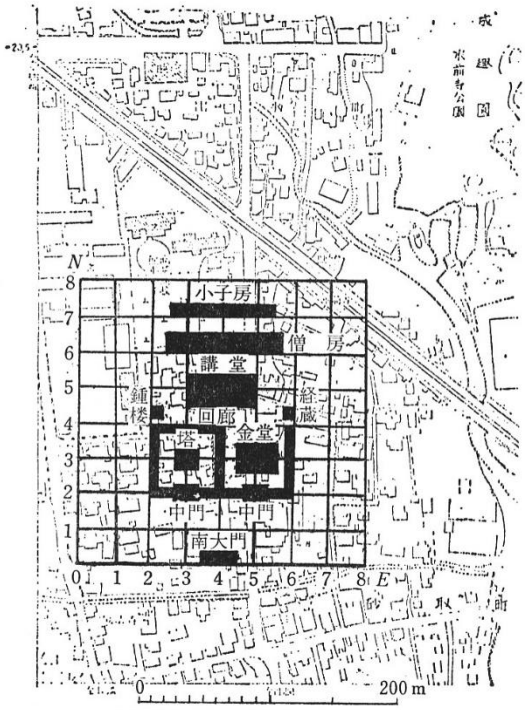
『新修国分寺の研究』に収められている肥後国分寺関係の論文集「第四　肥後」の冒頭の「一　国分寺」は、この発掘調査に基づく松本氏の論文である。

そしてこの論文による復元が従来の肥後国分寺についての理解であった。

まずこの論文を要約してその復元を概観し、次のこの復元の問題点をつかんでおきたい。

１：伽藍配置（松本氏の復元）

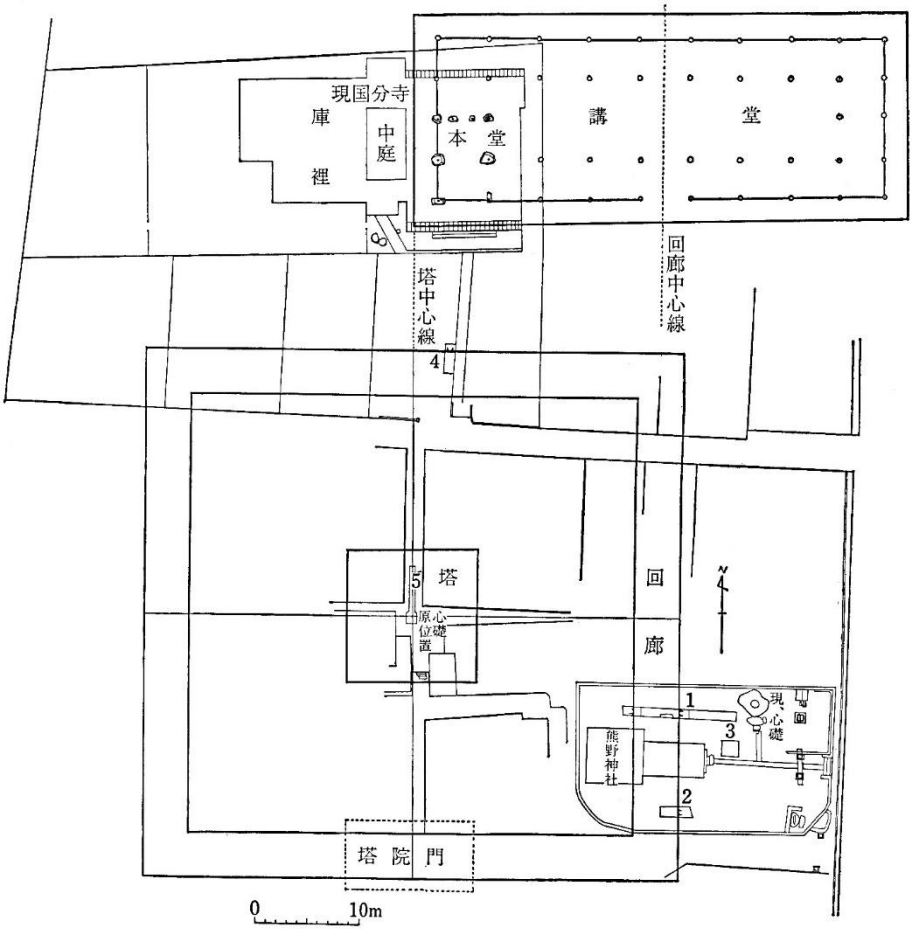
松本氏は次の「肥後国分寺伽藍復元図」のように、その伽藍と寺地を復元している。



第 93 図　肥後国分寺の地割

すなわち回廊の内に、東に金堂西に塔を配置する「法隆寺式」伽藍の変形で、西に回廊で囲まれた塔院を置き、その東に東と南を回廊で囲まれた金堂。これらの北に、講堂と僧房を置いた、とても珍しい伽藍である。

だがこの根拠となった遺構は極めて限られており、あとはすべて推定に過ぎない。
根拠となった遺構は以下の通り。



第91図　肥後国分寺塔院・講堂復原図

（「肥後国分寺塔院・講堂復元図」を参照）

★塔院

現在塔の心礎は現国分寺の少し南にある「熊野神社」の境内に置かれている。
だがもともとこの礎石はこの神社の西側の住宅地にあったもので、その位置は、現在の国分寺門前の東西の道路に直角に通じる南北の路地。この路地の途中に心礎があったと伝えられている。

a:心礎跡の確認と塔基壇の確認

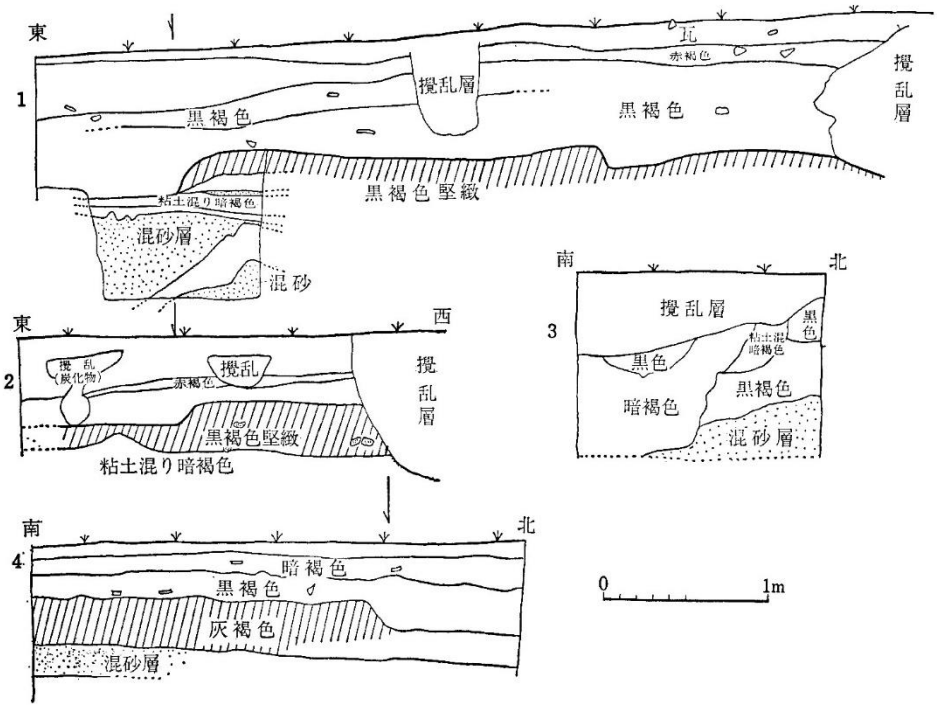
この路地を発掘して、心礎を置いた穴とその底を固めた安山岩の径 20 から 40 ㎝の石多数を確認。ここから路地を東西にそして付近の民家の庭先などをボーリング調査で地中を

確認したところ、塔の基壇の端は心礎中心から 6.3m の地点にあることを確認し、一辺 12.6 mの基壇と確認された。

ｂ：回廊の確認

またこの心礎中心から東に位置する熊野神社の境内に社殿の北と南に並行する二本のトレンチを入れたところ、幅５ｍほどの固く突き固めた黒褐色土の基壇が南北に連なることが確認された。ここは塔心礎中心からの距離は 26m 余の地点であった。

さらに塔心礎中心から北に 26m 余の地点の現国分寺参道の脇にも南北にトレンチを入れたところ、ここにも南北幅が２ｍ以上の規模で突き固めた灰褐色土の基壇状のものが見られた。



第 88 図　肥後国分寺回廊基壇　1　熊野神社 1ｔ　2　同 2ｔ　3　同ピット　4　現国分寺内 4ｔ

（「肥後国分寺塔回廊基壇」を参照）

以上の調査結果から、元の塔は塔院の形をとり、東西南北のそれぞれの幅が 57.5m の、回廊自体の幅がおよそ 5m の回廊で囲まれていると判断された。

★講堂

講堂は、現国分寺本堂の床下に７つの古い礎石が存在し、その規則的配置から、建物の西南の端と理解され、塔との位置関係から、ここを西南の端としてさらに東に広がる講堂の跡

と推定された。

さきの変形の法隆寺式伽藍との復元の根拠となった事実はこれだけなのだ。

★松本復元案の問題点

a：塔院という判断は正しいのか？

塔心礎の東 26m 余の所に、幅 5m ほどの南北に連なる回廊があったことは確実。だがこの回廊が塔の北にも回っているとの判断の根拠は、現国分寺参道脇のトレンチから見つかった南北幅３ｍ以上の基壇だが、この基壇の土は灰褐色土であるのに対して、熊野神社境内から見つかった幅５ｍの南北の基壇は黒褐色土である。

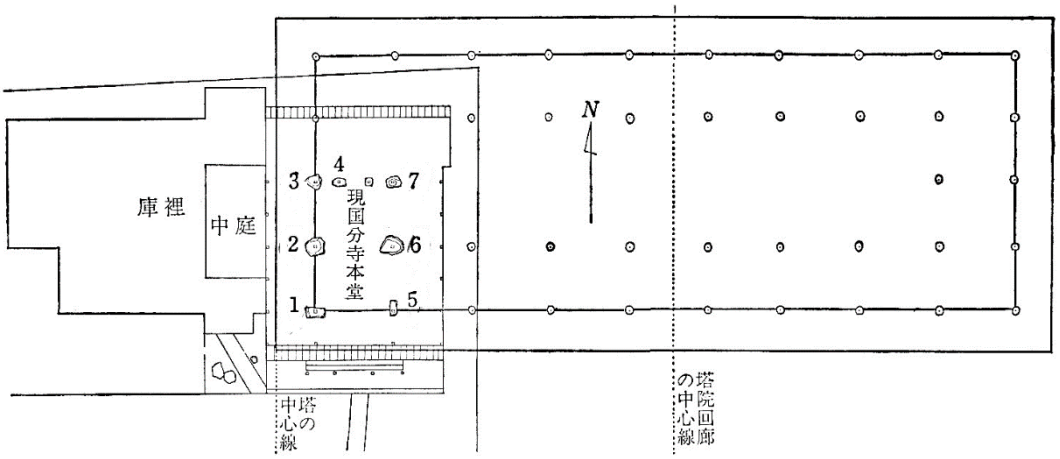
松本氏はこの土質の違いを無視して、一連の塔の周りを取り巻く回廊と判断している。

これは勇み足ではないか。

塔の東と北にほぼ心礎から等距離で回廊状の基壇があることは事実だが、これが塔の周りを囲むとは断定できず、むしろ基壇土の違いから、心礎の東の回廊と北の回廊は異なる時期に作られた回廊の一部と判断することも可能である。

したがって塔院との判断は保留せざるを得ない。

b:塔の北の建物は講堂なのか？



第 92 図　肥後国分寺講堂復原図

（「肥後国分寺講堂復元図」を参照）

塔の北、現国分寺の地下に古い時代の礎石が残存し、それらが付き固めた基壇の上にあることは事実だ。

だが現存するのは７つの礎石であり、「肥後国分寺講堂復元図」に見られる「４」の石は、現本堂の須弥壇の礎石として「５」の礎石を割った東半分をここに移動したものだが、他の六つの礎石は完形でなく一部を砕かれたものもあるが、元位置を動いていないと判断され

ている。

しかしこの礎石列の東側は現国分寺本堂よりも 70～80 ㎝地面が低くなり、そこにある礎石状の石も庭石として配置されたものなので、元位置を復元できない。

松本氏は東側の民家が現本堂に比べて低いのは後世に地面が掘削されたからと即断しているが、これは早計である。

現本堂の床下にある古い礎石は、元の位置を保っている六つの礎石で判断すると、建物の規模は東西南北それぞれ 10m 弱のもので、塔との位置関係を考えると、経堂か鐘楼。それも古代かどうかは確定できない。

こう検討すれば、変形の法隆寺式との松本復元案は机上の空論に過ぎないと思う。

c：松本復元案の方位は？

もう一つ問題なのは、松本氏の講堂復元図や塔院・講堂復元図には方位記号が記されているが、それが磁北を示すのか、真北を示すのかが不明なことだ。

本論文に掲載された「肥後国分寺の地割」(「肥後国分寺伽藍復元図」として本論には掲載)は、その街路などの向きからして、伽藍が真北で復元されたように見える。

だが塔院・講堂復元図と同じ場所を Google マップで確認すると、どうやら元図は「磁北」で作られていることがわかるのだ。

(「肥後国分寺塔院・講堂 Google マップ」参照)

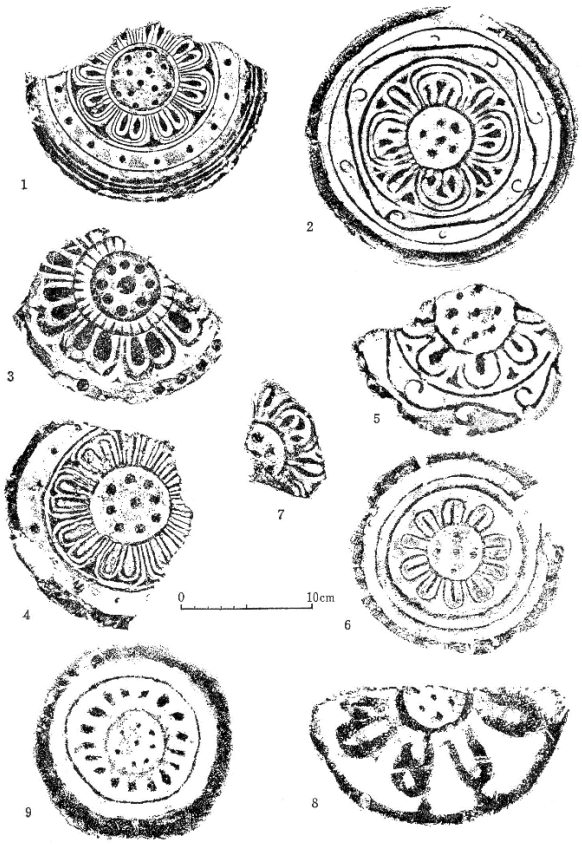
松本氏の復元図で塔院の回廊の向きを方位記号と比べてみれば、まったく一致しているので、松本氏は肥後国分寺伽藍を磁北で、つまり西偏で復元されたことがわかる。
だが冒頭に見た「伽藍復元図」ではそれは真北で復元されている。
この復元図は松本氏の発掘に基づいた「塔院・講堂復元図」の方位記号を真北と誤解してつくられたものであると思う。
岡山理科大学の日本考古磁気データベースで肥後国分寺の場所での磁北の変化を確認する。http://mag.center.ous.ac.jp/
これによると、肥後国分寺の場所での磁北の変化は以下のとおり。
2000 年　西偏 7.5
1980 年　西偏 7.2
1960 年　西偏 6.9
松本氏の調査は昭和 45 年 46 年だから 1960 年の西偏 6.9 度がこの時期の磁北だ。
とすれば松本氏の復元案は西偏 6.9 度で伽藍を想定していることになる。
「伽藍復元図」は、伽藍復元案を真北ではなく、西偏 6.9 度で作り直すべきだと思う。

※注：この松本復元案が西偏 6.9 度の磁北で作られているという認識は重要である。なぜなら、後に見るように、多くの論考が、肥後国分寺を真北の伽藍として考察してしまい、そのため肥後国分寺と肥後国府周辺の条理遺構が西偏であることと齟齬をきたし、このままだと国分寺の成立過程やその性格の把握に間違いが生じるからである。

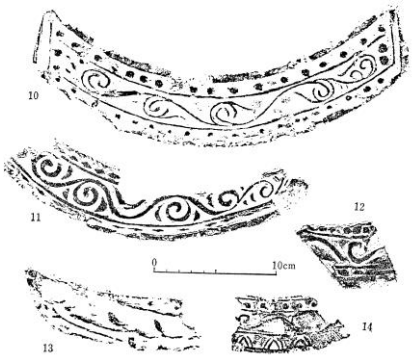
なお 2020 年の磁北を調べると、国土地理院地磁気測量
https://vldb.gsi.go.jp/sokuchi/geomag/menu_00/index.html
の 1999/1/1～2020/6/30 のデータを使用して作成した地磁気時空間モデルを使用して計算すると、
2020 年　西偏 7.18 度
である。
磁北は常に移動しているので、考古学発掘に基づく遺跡や遺構の図面を正確に把握できなくなる。やはり真北もしくはこれと同等の座標北を基準に遺跡や遺構の図面は作られるべきであり、どうしても磁北で測定されたものは、その図面作成時点のその地点の磁北の数値を明記する必要があると思う。

２：出土瓦から見た国分寺の変遷

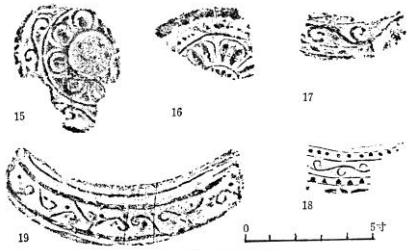
松本論文には肥後国分寺から出土した軒瓦の一覧がある。
まず軒丸瓦を見ておこう（「肥後国分寺軒丸瓦」「肥後国分寺軒平瓦」を参照）。



第95図　肥後国分寺の瓦（1）



第96図　肥後国分寺の瓦（2）



第97図　肥後国分寺の瓦（3）

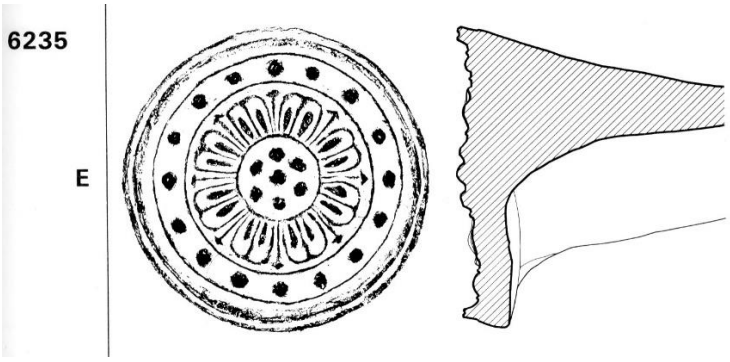
「肥後国分寺軒丸瓦」　　「肥後国分寺軒平瓦」

1：複弁８葉蓮華文軒丸瓦
　松本氏はこれを創建瓦とする。国分尼寺でも出土。つまり８世紀中頃の瓦と見ている。
2：単弁８葉蓮華文軒丸瓦
　蓮弁の周囲に唐草文を施す。国分尼寺でも出土。これも外郭は重圏文。８世紀後期とする。
3：複弁８葉蓮華文軒丸瓦
　新羅系統の瓦の影響と松本氏は見る。８世紀後期。
4：複弁８葉蓮華文軒丸瓦
　蓮弁は二重の線で描かれる。平安時代初期。
5：単弁８葉蓮華文軒丸瓦
　２と同様に蓮弁の外側に唐草文を施す。平安時代初期。
6：単弁 10 葉蓮華文軒丸瓦
　平安中期としている。
7：２の小片。
8：単弁８葉蓮華文軒丸瓦
　蓮弁は輪郭線だけで表す。平安末期。

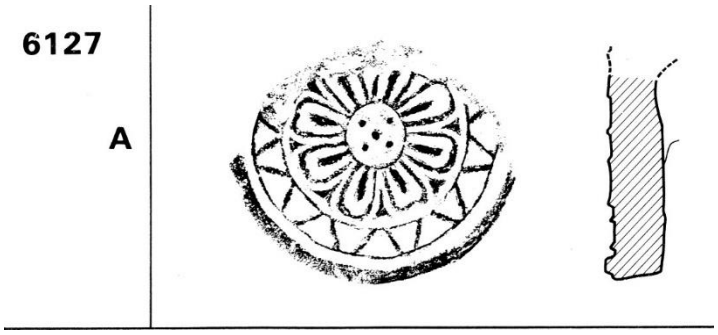
９：単弁 18 葉蓮華文軒丸瓦
　熊本市池上町の池辺寺塔跡から同じものが出土。平安末期。
15：単弁８葉蓮華文軒丸瓦
　２とよく似る。退化形式化。平安初期。
16：複弁８葉蓮華文軒丸瓦
　平安前期か。

　軒平瓦は次の通り。
10：均正唐草文軒平瓦
　１の複弁８葉蓮華文軒丸瓦とセットの瓦と見る。
11：均正唐草文軒平瓦
　10 の変形。国分尼寺でも出土。２の単弁８葉蓮華文軒丸瓦とセットの瓦と見る。唐草文の下は重圏文。
　以上二つが奈良時代の創建瓦とし、その他の 12・13・14・17・18・19 は皆、平安時代初期から後期と見る。

★松本氏の年代観の疑問点
　松本氏は、国分寺は聖武詔でできたと考えているので、創建瓦は８世紀中頃とする。
　このため蓮弁に子葉が表現されていない瓦、いわゆる素弁瓦と見ることのできる８・９は、退化した瓦とみなされて平安時代末期にされてしまっている。
　だがこれらは６世紀末頃に比定されるべきもの。
　これらの素弁瓦が創建瓦と見るべきだ。
　さらに肥後国分寺の軒丸瓦の中に、８世紀初頭から中頃の平城宮瓦とよく似たものが見られる。
軒丸瓦１：松本氏は注目していないが、最も外側に重圏文を施しており、これとよく似た瓦が平城宮からも出ている（「平城宮瓦 6235E」を参照）。



軒丸瓦６：この瓦も蓮弁の外側が重圏文になっており、これとよく似た瓦が平城宮から出ている（「平城宮瓦 6127A」を参照）。



つまりこの二つの瓦は6世紀末に作られた最初の寺院が、8世紀中頃の聖武詔で改造された可能性を示している。

「新修国分時の研究」所収の松本氏による「肥後国分寺」についての論文の概要とその疑問点は以上の通りである。

この論文の元になった昭和45年46年の発掘以後、熊本市のさらなる都市化に伴い、消滅する恐れのある国分寺遺構を探るためいくつか本格的な考古学的発掘が行われている。

そのうちの現国分寺のすぐ北側の区画整理事業に伴って行われたE地点の発掘は、松本試案とはことなる、肥後国分寺の様相を明らかにしている。

『新修国分寺の研究』では、松本論文に続いてこのE地点の発掘の成果について詳しく記してあり、さらにこの昭和56年の発掘の報告書はネットでも見られるので、項を改めて、その後の発掘成果を見ておこう。

2021年7月4日

※肥後国分寺については、3月2日から28日にかけて、肥沼さんが再検討したものを川瀬がチェックして論じたものがあるが、元資料を見ていない人には何を論じているか不明な点が多いので、ここに川瀬が再度資料を精査して再検討し、文章化した。